

利活用成果のフィードバックとメタデータ

後藤忠彦（岐阜女子大学）

フィードバック情報の改善、活用に役立つ整理・保管をし、デジタルコンテンツの提示・提供（プレゼン等）のための活用から人々のもつ課題の解決、知的創造等の多様な活用がされだした。その活用の成果・改善点などがデジタルアーカイブ機関、開発等にフィードバックされ、デジタルコンテンツの価値を高めたり、より、有効な活用がされるようになってきた。

そこで、これらのフィードバックされた情報を適切に保管し、

- ①次の活用へ役立て、
- ②デジタルコンテンツの改善や
- ③関連資料とリンクさせ、

より良いデジタルコンテンツにしていくことが求められる。

そのためには、フィードバック情報をどのように保管し役立つかが課題になってきた。

フィードバックとメタデータ

岐阜女子大学では、2012年からデジタルコンテンツの提示・提供（プレゼン等）の使い方、課題解決、知的創造までの活用の実践を進め、その成果等をフィードバックして改善を進めてきた。その経験をもとにフィードバックを整理し、何をどのように役立つか検討をした。その結果、次のような利用と整理の視点が重要と考えた。

- ①関連資料（デジタルコンテンツの価値を高める）……リンク

デジタルアーカイブを活用していて、「こんな資料を追加し説明するとよく分かった」とか「○○○との関係が明らかになった」という意見や、「当時の情報を示す映像があるとよりよい」等の意見が出てきた。こうして挙げられた関連資料とデジタルコンテンツをリンクさせ使えるようにした。このようにデジタルコンテンツの価値を高めたい。

- ②活用のプロセスの改善点（より良いデジタルコンテンツに改善するために）

実際にデジタルコンテンツ等を使って、実施（活用）し改善点が提供される。また、活用の計画、実施、評価、改善のプロセスやその根拠、情報が提供される。これは、デジタルアーカイブを良くする大変重要な情報であり、また、その活用に役立つ情報でもある。

③特色

使ってみて、デジタルコンテンツの提供資料としての特色や課題解決等の方法の特色が分かることが多い。これらの特色について活用者からの提供は、次に活用する者の情報である。ただ、これらの特色は、主観的な情報が含まれているので、利用する者もその点を配慮し活用すべきである。

④活動支援（利用注意）

実際にデジタルコンテンツを使うと、利用上の問題点が見えてくる。この活用注意・活用支援の情報をいかに次の活用者に伝え、役立たせるかが課題である。ただし、この情報も主観的な要素が入るので、その点を配慮して使うべきである。

⑤利用分野

実践を通して、デジタルコンテンツがどのような分野での活用に適しているか情報が送られてくる。この利用情報の次の活用者にとっては、どこで使うかが重要な情報である。実践結果から、関連資料、改善点、プロセス、特色、活動支援（利用注意）、利用分野の情報をいかに保管し改善することで次の活用に役立つように作るかが重要である。

そこで、これらの情報をメタデータに追加し、利用できるように次のリストに示すように構成した。

ここで関連資料はいくつかの役立つ資料のリンク情報を記入する。（リンク先にデータが保管されている）

メタデータの試行例

1	ID	
2	表題名	
3	資料名	
4	内容分類	
5	分類コード	
6	内容(抄録)	
7	索引語	
8	関連資料	リンク情報
9	種類	
10	氏名	
11	時代・年代	
12	場所／地域	
13	著作権／プライバシー	
14	協力者	
15	許認可	
16	登録日／登録者	
17	ファクトデータ	
18	特色	
19	活用支援(利用注意)	
20	利用分野	
21	改善結果	
22	処理プロセス	

主観的な情報を含むメタデータは大塚明朗先生に叱られる！

故大塚明朗先生は（元日本ドクメンテーション協会会長）は、メタデータは客観的なデータであるべきだとよく言われていた。抄録も著者抄録はだめで、第三者抄録にすべきだとよく私も注意され困ったことがあった。確かに論文のメタデータは、より客観的で共通性が重んじられる。しかし、デジタルアーカイブのように、ときには、いかに活用させるかが重要なデジタルコンテンツは、多少主観的な情報がよく用いられる。

たとえば、テレビのコマーシャルでも「これは、利用者の主観です……」のような表現が出ている。デジタルアーカイブはテレビのコマーシャルとは違うが、注目させ、どのように使うか考えるのに適した情報を上手に伝える必要がある。多分、大塚明朗先生は、「後藤さん、メタデータはね……」と叱られるであろう。